

内発的イノベーション型
まちづくり

主催：大阪府豊能町
令和3年3月28日

はじめに

人口減少と少子高齢化が進行する現在、日本の各地方自治体では、縮小社会・縮退社会を前提とした独自の地域運営が求められるようになっていきます。そんななか豊能町では、平成29年度より、地域に暮らす住民の方一人ひとりの可能性を地域の資産ととらえ、その可能性の発掘・開花を支援することで地域の活性化をめざしていく**内発的イノベーション型まちづくり**を、女性活躍推進事業として進めてまいりました。

本報告書は、令和3年3月28日に開催した「内発的イノベーション型まちづくりフォーラム」の内容をまとめたものです。これまで取り組んできた**内発的イノベーション型まちづくり**の集大成として、豊能町のまちづくりの実践報告と、同様の取り組みを行う山形県置賜地域の事例紹介を行いました。後半のパネルディスカッションでは、専門家を交え、人口減少・少子高齢化の課題を抱えた地域における新たなまちづくりの可能性について、「ひとりの可能性から拓いていくまちづくりとはどのようなものなのか」「どんな方法で実施され、どんな結果がまちにもたらされているのか」という、本質に迫った議論が展開されました。

本報告書を通して、**内発的イノベーション型まちづくり**の実践から得た知見を、地域にお住まいの住民の皆さんや、全国の地方自治体関係者、そしてまちづくりに関わる様々な皆さんに共有することで、新たな地域活性の一助となりましたら幸いです。

豊能町長 塩川恒敏



目次 INDEX

はじめに	002
登壇者プロフィール	004
開会のご挨拶	005
イントロダクション「内発的イノベーション型まちづくりとは」	006
発表：井上良子(京都市ソーシャル・イノベーション研究所)	
事例報告	007
①大阪府豊能町の内発的イノベーション型まちづくり	
報告：浅海毅(豊能町住民人権課 課長)	
松原明美(一般社団法人こころ館 代表理事)	
コメント：前野隆司(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授)	
今里滋(同志社大学大学院 総合政策科学研究科 教授)	
②山形県置賜地域の内発的イノベーション型まちづくり	015
報告：坂倉杏介(東京都市大学 都市生活学部准教授)	
コメント：前野隆司・今里滋	
パネルディスカッション「暮らすまちのウェルビーイングと内発的イノベーション」	022
登壇：前野隆司・今里滋・坂倉杏介・松原明美・浅海毅	
付録	026
おわりに	029



※役職は当時

登壇者プロフィール

コメンテーター



今里 滋

(同志社大学大学院総合政策科学研究科ソーシャル・イノベーションコース教授)

九州大学大学院法学研究科博士後期課程修了。法学博士。九州大学・同志社大学名誉教授。2006年度から同志社大学大学院総合政策科学研究科に日本初のソーシャル・イノベーションコースを設立。自ら現代社会起業研究や公共性研究の授業を担当するほか、有機農業や狩猟の実践指導も行ってきた。著書に『アメリカ行政の理論と実践』（九州大学出版会）、『地域の自立は本当に可能か』（学芸出版社）他多数。

コメンテーター



前野 隆司

(慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科教授)

東京工業大学卒。東京工業大学修士課程修了。キヤノン株式会社、カリフォルニア大学バークレー校研究員、ハーバード大学客員教授などを経て現職。慶應義塾大学ウェルビーイングリサーチセンター長兼任。博士（工学）。専門は、システムデザイン・マネジメント学、幸福学、幸福経営学など。著書に、『幸せな職場の経営学』（2019年）、『幸福学×経営学』（2018年）、『幸せのメカニズム』（2014年）、『脳はなぜ「心」を作ったのか』（筑摩書房、2004年）など多数。

事例発表者



松原 明美（一般社団法人こころ館代表理事）

同志社大学大学院総合政策科学研究科博士課程修了。ソーシャル・イノベーション博士。「内発的イノベーション」考案者。

2013年、一般社団法人こころ館設立。教育現場や企業における3000人以上のカウンセリング経験と大学院での研究をもとに、独自の研修プログラムである「わたし研究室」を開発。さらに、内発的な動機から生まれた個人の可能性から、組織や地域が発展・成長していく営みを内発的イノベーション(InnerInnovation)と名付け、2015年より実践的研究を行う。2018年、大阪府豊能町女性活躍室との協働による内発的イノベーション型まちづくりを始動。2021年には、組織と地域の新たな発展の道筋を模索するために「インナー・イノベーション研究所」を設立。ひとり一人の可能性が十全に発揮できる、より良い社会の実現を目指す。

事例発表者



坂倉 杏介（東京都市大学 都市生活学部准教授）

慶應義塾大学大学院博士後期課程単位取得退学。博士（政策・メディア）。専門はコミュニティマネジメント。三田の家LLP代表、NPO 法人エイブルアートジャパン理事ほか。多様な主体の相互作用によってつながりと活動が生まれる「協働プラットフォーム」という視点から、地域や組織のコミュニティ形成手法を実践的に研究。芝の家（港区）やおやまちプロジェクト（世田谷区）をはじめ、様々な地域のコミュニティ事業を手掛ける。共著に『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために その思想、実践、技術』（BNN出版）、『コミュニティマネジメント つながりを生み出す場、プロセス、組織』（中央経済社）など。

モデレーター



井上 亮太郎（パーソル総合研究所 主任研究員）

大学卒業後、大手総合建材メーカーにて営業、マーケティング、PMI（組織融合）を経験。その後、学校法人産業能率大学に移り組織・人材開発の教育コンサルティング事業に従事。2019年4月よりパーソル総合研究所にて調査研究に従事し、機関誌「タレントマネジメント実態調査（2019）」・「はたらく人の幸福学（2020）」等を発表。その他、論文・コラム等執筆、講演など多数。専門は人的資源管理、組織・人材開発、システムデザイン、感性工学。修士（SDM）、慶應義塾大学大学院特任講師、Project Management Institute（PMP）。

総司会



井上 良子（SILK イノベーション・コーディネーター）

九州大学法学部/法科大学院修了。九州大学ソーシャル・ビジネス研究センターで7年間ソーシャル・ビジネスの普及・促進、創出支援、研究・教育に従事。ムハマドユヌス博士やグラミンググループ、海外の教育機関等との連携を進める。組織やセクターを越えた成長への伴走を軸に2017年からはNPO法人クロスフィールズで留職プログラムやフィールドスタディ事業を担当。現在は京都から“四方よし”のビジネスやソーシャル・イノベーションを発信し、アジア・グローバルとつなげることを目指している。

※役職は当時

開会のご挨拶

このたびはご多用の中、大阪府町村会共催「内発的イノベーション型まちづくりフォーラム」にお集まりいただき誠にありがとうございます。今回はコロナ禍での開催ということで、オンラインと現地で同時配信を行うハイブリッド型のフォーラムとなりました。定員 100 名を超える参加申込をいただき、皆さんのまちづくりに対する関心の高さを感じております。内発的イノベーション型まちづくりを簡単に申し上げると、地域で暮らす方々に幸せになっていただき、その幸せが人々をつないで、町が発展していく。そして地域での生活が豊かになっていく。そんなことを目指した取り組みでございます。

全国からご参加いただいている皆さんの中には、豊能町のことをご存知でない方もおられるかと思います。大阪市内から 30km 圏内に位置しており、新名神インターよりすぐ、能勢電鉄を經由して阪急線にもつながるなど、アクセスは非常に便利です。人口は 1 万 9000 人ほどで、大阪府下にある 43 の自治体のうち 36 番目という小さな町でございます。先程のオープニング映像（*）にもありましたように、豊能町は農業を中心とした田舎の顔と、民間デベロッパーによる住宅開発が進んだ都会の顔の両方を併せ持っているのが、この町の特徴です。私自身も、30 年～50 年前に開発された新興住宅街に引っ越してきた一人でした。大自然の中での子育てを満喫でき、仕事から帰ってきて癒される、そんな町です。

一方で、ベッドタウンということもあり、若い方々に就労いただくような産業が少ない面もあります。若い方にとっては、生活しにくいところがあるかもしれません。この町を持続させていくために、私たちが克服しなければならない課題はたくさんございます。そんななかでも、豊能町の方々は非常に元気で、たくさんの方々が活躍されています。特に女性の方々のご活躍は、「トヨノレポーター」や「とよのわたし研究室」の取り組みからも見えるように、目まじしいものがございます。

私たち行政が今後進めていかなければならない仕事は、今お住まいの皆さんや、今後移住される方々にとって、住み心地のよい町をつくるということです。人が主役の町をつくっていききたいと常日頃より思っております。そしてまちづくりというのは、行政だけでは絶対にできません。主役である住民の皆さんとともに、一緒に作り上げていかなければならないと考えております。そんなまちづくりのあり方を、本日皆さんと一緒に考えていけたらと思います。

最後に、本フォーラムの実施にあたっては、一般社団法人こころ館と前田展広事務所に企画・運営をお願いし、日本ソーシャル・イノベーション学会と公益財団法人京都高度技術研究所（SILK）に開催協力をいただきました。関係者の皆さん方のご尽力を賜りましたことを心より感謝申し上げます。以上をもちまして、開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

* 豊能町の風景は、フォーラムのアーカイブ映像にてご覧いただけます



豊能町長 塩川恒敏





内発的イノベーション型まちづくりとは？

井上良子（京都ソーシャル・イノベーション研究所）

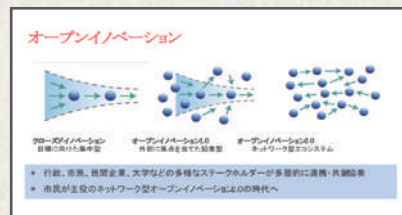
はじめに、総合司会の井上良子さんより、時代背景やイノベーション・まちづくりを取り巻く現状を踏まえ、「内発的イノベーション」に関する簡単な導入説明をしていただきました。

井上: 皆さんこんにちは。わたしは普段、京都市のソーシャル・イノベーション研究所（SILK）に勤めております、井上良子と申します。事例報告に入る前に、まずは今回フォーラムのテーマになっております内発的イノベーション型まちづくりやテーマに関する簡単な背景について、わたしの方からご説明したいと思います。



画一化から個別最適化時代へ

皆さんは、「イノベーション」という言葉を聞いて、何を思い浮かべますか？よく「技術革新」とも訳されることから、企業やテクノロジーを連想された方も多いかもしれません。かつてはそのような文脈で用いられることの多かったイノベーションという言葉ですが、近年は、「新しい価値と価値との結合」という意味合いで、広く地域や社会のなかでのイノベーションが志向されるようになっていきます。今回のテーマである、まちづくりの領域においても、市民の方や行政の方、地域内外からの専門家など、多様な関係者が一緒になって、今までにない仕組みを作り出していこうとする「オープン・イノベーション」が各地で目指されつつあります。



そのなかでも、内発的イノベーションは、一人ひとりの内面に焦点を当てて、そこから湧き出てくるものを探求していくアプローチである点にその特徴があります。



一人のなかから見出された可能性を、その人のなかだけに留めるのではなく、地域や組織など身の回りに少しずつ開いていく。その結果、一個人を起点にして、地域や組織、ひいては社会が成長していく。そんなあり方を目指しています。今回豊能町で取り組まれた内発的イノベーション型まちづくりは、そのアプローチを地域に応用した、挑戦的な試みとなります。

画一化から個別最適化時代へ

現在、様々な分野で個人に焦点を当てる流れが進みつつあります。例えば経済の分野では、従来の大量生産・大量消費に象徴される画一化された商品が主流であったところから、個人の感性やライフスタイルに合わせた、ユニークで個別的商品に価値が見出されるようになっていきます。また、企業や組織の人材育成においても、「どんな働き方をしたいのか」「仕事を通じて何を実現したいのか」といった一人ひとりの願いや動機に立ち帰る流れが生まれています。さらに教育分野では、「個別最適化された学び」というキーワードが掲げられ、子どもたち一人ひとりに合ったオーダーメイド型の教育の必要性が議論されています。一方で、現在、国や政府が提唱する地方創生のプランは、人口減少といったマクロな課題や財源の分配等に目が向けられ、住民一人ひとりに着目するには至っていないと感じます。

そんななかで、すでにその地域にある資源、とりわけ住民の方の可能性を活かした内発的イノベーション型まちづくりの取り組みは、個別最適化の時流にも乗った、今後のまちづくりを考えるうえでの示唆的な事例であると考えます。以上のような時代背景を踏まえていただくことで、以下に続く事例報告やディスカッションの内容が、より皆さんにとって意義のあるものになるのではないかと考えています。



事例紹介

フォーラムの前半では、大阪府豊能町・山形県置賜地域で実践された内発的イノベーション型まちづくりの事例報告を行いました。それぞれの報告後には、幸福学の研究者である前野隆司先生（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授）と、ソーシャル・イノベーションの研究者である今里滋先生（同志社大学総合政策科学研究科教授）より各実践に対するコメントをいただきました。



大阪府豊能町の内発的イノベーション型まちづくり



浅海毅（豊能町住民人権課課長）・松原明美（一般社団法人こころ館代表理事）

浅海：皆さんこんにちは。豊能町住民人権課の浅海です。ここからは、私とこころ館の松原さんから、豊能町で実施してきた内発的イノベーション型まちづくりについてご紹介したいと思います。



豊能町の概要

浅海：豊能町は、京都と兵庫に隣接する、大阪府最北部のまちです。人口はおおよそ19,000人、高齢化率は46.8%となっています。高齢化や転出超過によって人口減少が深刻化しており、今から25年後には人口が半減するという予測も立っています。町の構成は、大きく東部地域と西部地域に分かれており、人口の約8割が戸建て中心のニュータウンがある西部地域に集中している状況です。東部地域は、一部を除いておおむね農村部となっております。また、町全体の特徴として、小中学校と幼稚園はあるものの、高校がありません。

現在の課題は、やはり人口減少です。これは豊能町に限らず、多くの地域に多く共通する課題だと思いますが、人口減少に伴う町全体の活力の低下や、公共交通の確保、それから財政悪化による行政サービスの低下などが懸念されている状況です。

1 大阪府豊能町というまち

(1) 地勢
位置：大阪府北部に位置し、北に能勢町、亀岡市、東に茨木市、南に箕面市、西に川西市、篠原市に隣接

地勢：山林で町の東西が分かれ、主に東地域は農村部、西地域は昭和40年代に始まった住宅地

交通：西部地域には能勢電鉄及び阪急バス、東部地域は阪急バス

(2) 人口状況

人口：19,011人 (R3.3.1)
高齢化率：46.8% (R3.3.1)

学校等：幼稚園2か所、保育所1か所、認定子ども園1か所、小学校4か所、中学校2か所があるが、町内に高校がない。

人口構成：人口の約8割が住宅地である西部地域に集中
人口の90%が戸建て中心のニュータウンに居住

転出超過により、人口減少が進み、ピーク時（平成7年）に26,617人だったものの、平成52年には12,275人になって減少すると予測。（「豊能町人口ビジョン」）

これまでのまちづくりの取り組み

こうした状況に対して、本町では国が推進する地方創生計画に則った「豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略」（注1）や、「豊能町総合まちづくり計画」（注2）というものを立案するなど、対応を試みております。また、様々な事業にも取り組んでまいりました。地域ぐるみの定住促進の一環として実施した町のブランドメッセージづくりや、豊能町の魅力を発信する「トヨノレポーター養成講座」。こちらのメンバーは、「トヨノポータル」というWEBサイトで継続して情報発信を行なっております。さらに、住民の方々の提案による地域プロジェクトを支援する事業「トヨノドリーム」や、その事業を引き継いで生まれた「トヨノ応援会」。先日、この応援会からは豊能町の初のヘルスケアブランドが誕生しています。

(1) 地域ぐるみの定住促進

①地域の人口による魅力の再発見とまちの魅力を表すブランドメッセージづくり

②町内外からの住民によるトヨノレポーター養成講座

③ポータルサイト「トヨノPORTAL」
→トヨノレポーターによる魅力発信

④住民による地域のプロジェクト推進事業「トヨノドリーム」
→相談支援型の「トヨノ応援会」へ改編

3 人材育成への取り組みについて

わたし研究への興味と契機

(1) なぜ人材育成に取り組んだのか
⇒活躍できる人と内情を必要とする人の存在

(2) 住民と職員による「わたし研究」
⇒ともにまちづくりへのチャレンジと可能性

(3) 女性活躍やまちづくりの人材育成への可能性
⇒内情の多い住民によるアプローチ
住民の潜在的な可能性を町の資産としてとらえる

→とよのわたし研究室
調査ライター

内面的関係の整理

その人らしき行動範囲
(子育て・地域活動・仕事・人のつながりなど)

その人らしく活躍する人材へと成長
(プロジェクト推進事業への参加など)

女性活躍室の取り組み

そして私が所属する住民人権課でも、平成28年度より女性活躍室が設置され、女性活躍を軸にした2つの事業が立ち上がりました。ひとつはマルシェ支援事業です。こちらの事業は、現在有志の住民の方による「トヨノつながるWEマーケット」という市民団体に引き継がれています。そしてもうひとつの事業が、この後に詳しくご紹介があります。人材育成事業「とよのわたし研究室」（注3）です。こちらは3年間、一般社団法人こころ館さんと一緒にプログラムを行ってまいりました。この「とよのわたし研究室」は、自分の内面をふり返ることを通してこれからの自分らしい生き方を探求していく全5～6回のプログラムです。メンバーの方からは、市民団体「とよのわたし研究室」を設立された方や、起業された方、ものづくり作家になる方など、様々な活動が生まれました。

(注1) 人口減少を克服し、将来にわたって成長力を確保することで「活力ある日本社会」を維持することを目指す国の施策に基づく戦略。

(注2) 町を取り巻く状況を踏まえ策定された、新しいまちづくりを行う柱となる総括的な計画。

(注3) 「わたし研究室」は一般社団法人こころ館が開発した独自の研修サービスの名称。



豊能町には、先ほどのマルシェのように、すでに活発に何か活動に打ち込んでいらっしゃる方々もたくさんいらっしゃいますが、そうではなく、まず自分は何がしたいんだろうというところから内省を必要とされる方々もいるのではないかと考えました。そういった方たちの潜在的な可能性をまちの資産として捉え、活躍していただけるような機会をつくるべきだと考え、「わたし研究」に取り組むことにしました。内面が整理されてすっきりしたところから、その人らしい行動の変容が起こる。それがイノベーションなのだと思います。その結果、ご自身の子育てにより影響がもたらされたり、地域活動につながったり、あるいは活動という形ではなくても、その人がその人らしく活躍する人材へと成長することにつながっていけばと考えておりました。

それではここからは、共同で内発的イノベーション型まちづくりを実践した一般社団法人こころ館の松原さんにボタンタッチして、実践の詳細をご報告いただきたいと思います。

松原：皆さん、こんにちは。一般社団法人こころ館代表の松原と申します。私たちこころ館は、一人ひとりが可能性を十全に発揮できる社会を目指し、人材育成事業に取り組む団体です。2017年に企業向け研修サービス「わたし研究室」をスタートさせ、はたらくうえでのアイデンティティの再形成を通して、個々人の本来持っているクリエイティビティを生み出すための人材育成に取り組んできました。



また、2015年からは同志社大学大学院にてソーシャル・イノベーション研究を行い、内発的な動機から生まれた個人の可能性から、組織や地域が発展・成長していく営みを内発的イノベーション（注4）と名付けて実践的研究を行ってきました。本日は、豊能町の内発的イノベーション型まちづくりの実践内容と、大学院での研究成果も踏まえてご報告させていただきます。

（注4）内発的イノベーションに関する研究には、「内発的イノベーションによる地域づくり論序説」（2019年・『同志社政策科学研究』21(1)）、「住民の潜在的可能性に基づく地域づくりに関する予備的研究ーミャンマのー開発僧による地域開発の事例を手がかりにー」（2020年・『地域活性研究』12）、「内発的イノベーションによる地域づくりの実践的研究」（2021年・同志社大学博士論文）がある。いずれも筆者は松原明美。

まちづくりの原点：すべての人の可能性を信じる、東南アジア僧侶の地域開発

わたしが内発的イノベーション型まちづくりを構想したのは、開発僧と呼ばれる僧侶たちとの出会いがきっかけでした。2006年～2015年のおよそ10年間、東南アジアで人道支援活動に携わっていたのですが、その時出会ったのが「開発僧（かいほつそう）」と呼ばれる僧侶たちです。

「かいほつ」とは仏教に由来する言葉で、「自らの潜在能力を開花させ、人間性を発現していく物心両面における内発的な実践」を意味します。現地では、日本の役場のような役割を開発僧が担い、地域開発にも積極的に関わっておられました。

地域開発と聞くと、インフラ整備や商業施設の誘致といったものを連想されるかもしれませんが、開発僧たちは「全ての人の中には眠っている可能性が必ずある」という姿勢のもと、村人一人ひとりの可能性を見出すことを基礎にした地域開発に取り組まれていました。そして、自らお寺を飛び出し、道路や橋の整備、子どもたちの教育など、村人と二人三脚で活動に取り組まれていました。



そんな開発僧たちの地域開発のプロセスを明らかにするため、大学院では、様々な地域の開発僧にインタビュー調査を行い、彼らがどのようなプロセスで地域を発展させていたのか分析しました。そして調査の結果、地域開発の起点に、村人の潜在する可能性を発掘する教育活動を行うことで、村人のアイデンティティ形成が促進され、自分軸を持って村のために能動的に働ける人材を輩出していることがわかりました。さらに、村人たちには「人や地域の役に立つことが自分の喜びである」という自利利他の精神が育まれおり、互いに助け合い、支え合いながら、村を発展させていたことが確認できました。

この開発僧のまちづくりにヒントを得て発案したのが内発的イノベーション型まちづくりです。そして、このまちづくりモデルを実践したのが、今からご紹介する豊能町の事例となります。





とよの式内発的イノベーション型まちづくりとは

豊能町では、自治体、こころ館、外部のまちづくりの専門家の方が連携し、協働で内発的イノベーション型まちづくりに取り組みました。このまちづくりは、次にご紹介する3つのフェーズで構成されます。

【第1フェーズ：自分を内側から理解する自己教育】

まず第1フェーズでは、豊能町で暮らす女性たちの潜在的な可能性を発掘するため、女性活躍室主催の人材育成事業「とよのわたし研究室」を実施しました。企画運営はこころ館が受託し、月に1〜2度の開催で、全5〜6回の講座を行いました。対象としたのは「何かはじめてみたいけれど、何をしたらよいかわからない」また「自分のことをみつめなおしたい」という地域で暮らす女性たちです。2018年に開校以来、3年間で45名の方に受講していただきました。

講座では、これからの自分らしい生き方や、叶えたいこと・実現したいことを「研究テーマ」と呼び、じっくり時間をかけてテーマを探求していきました。わたし研究では、自分を知るために、これまで自分がどんな人から影響を受け、何に心を動かされてきたかなど、感情にフォーカスしながら他者と一緒に探求を内側から自分のことを理解する自己教育を通して、これからの自分らしい生き方や、地域で実現したいこと、叶えたいことを見出していきました。



わたし研究をする上では、他者との対話の時間を必ず設けています。対話を通じて、認識のズレなど自分ひとりでは気づけないことを発見していくのです。評価なしの全肯定でお互いの話を聴き合うことで「わかってもらえている」という安心感が広がります。また、講座の最初と最後には、チェックインとチェックアウトの時間を設け、ファシリテーターから受講生一人ひとりに向けて、感情にフォーカスするような問いかけや、フィードバックを行いました。そのやりとりを見ている人も、その人のことを理解できるほか、自然に気づきの連鎖が起こっていきました。

わたし研究のなかでは、これまでその人の成長を阻害していた要因や、固定観念などを手放す瞬間が訪れます。抑圧されていた感情が解放されることで、本来の自分らしさを取り戻し、心の奥底にあった本当に叶えたいことや、実現したいことが内側から湧き上がってきます。こうした内発性は、湧き水のようにあふれ続けるため、モチベーションが下がりにくくなります。



講座の最終回には、「研究テーマ発表会」を設け、講座を通して発見した「研究テーマ」を町内外の方に向けて発表していただきました。発表会では、大学の教授や企業の方、地域の有識者の方など、地域内外からゲストを招き、受講生の発表に対するメッセージをいただきました。また、地域住民の皆さんにもご参加いただくことで、受講生と応援者とのつながりをつくることを目指しました。

今回のフォーラムのコメンテーターである今里滋先生にもお越しいただいたのですが、その際には総評として「わたし研究を通して自分らしさを発揮した人は、まるで発酵菌のようなもの。自分発酵した人が地域に散りばめられることで、発酵が他の人にも伝播していき、気がつけば美味しい香りが地域いっぱい広がっている」とコメントをいただきました。この先生の言葉を受け、自分らしさを発揮している人のことを「自分発酵している人」と呼ぶようになり、内発的イノベーション型まちづくりの特徴を「発酵型のまちづくり」とご説明するようになっていきます。





また、このプログラムでは、行政職員の皆さんが住民さんと一緒に講座を受講するスタイルをとりました。普段は講座を運営する側の職員さんが、住民さんに混じって講座を受けるという例はこれまでほとんどなかったそうで、最初は戸惑っておられる方もいらっしゃいましたが、回を重ねるなかで、いつしか住民・職員の立場を超えた信頼関係が生まれていました。また、住民の皆さんの地域で実現したいことや叶えたいことが生まれるプロセスに職員さんも立ち合っているため、その後の業務でも、一人ひとりにあった適切なサポートがしやすくなっているとのことです。



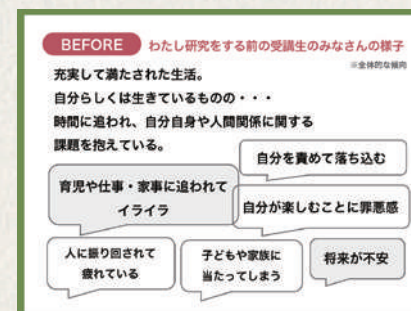
大学院での研究では、この第1フェーズのなかで受講生に何が起こっていたのかを調べるため、1期生・2期生の皆さんの語りを文字起こしして、質的データ分析法を用いた分析をしました。

【検証結果1：アイデンティティの再形成が進んだ】

分析の結果、わたし研究をする前の受講生の語りからは、充実して満たされた生活を送り、自分らしく生きている自覚がある一方で、時間に追われ、「将来に対して不安を抱えている」「自分を責めて落ち込む」「人に振り回されて疲れている」など、自分や人間関係に関する課題を抱えている傾向にあったことがわかりました。

そして、わたし研究をした後の受講生の語り分析したところ、自己課題を探索し解決している様子が明らかとなりました。その結果、「自信がついた」「実行力がついた」「いらいらしくなくなった」などの変化を確認することができました。

先行研究では、こうした自己課題の探索がアイデンティティ形成に密接に関係していることがわかっており、「とよのわたし研究室」でも、受講生のアイデンティティの再形成が進んでいたという仮説がたちます。



AFTER わたし研究をした結果

課題を自覚した	理想と現実のギャップを発見、コンプレックスを発見
課題を克服するための実践をはじめた	よりよい環境をつくる努力をはじめた 子どもに理想を押しつけなくなった 人に気持ちを打ち明けるようになった
課題を克服した	自信がついた、実行力がついた イライラしなくなった 他者への接し方が変わった
課題やとらわれから解放された	理想／不安／もやもや／ぐちからの解放
課題を解決して心が軽くなった	余裕が生まれた、寛容になった

他にも「新たなアイデンティティを発見した」「ありのままの自分を認め、受け入れた」「自分の気持ちを重視するようになった」「人間関係に良い変化が生まれた」などの変化も見られました。

【検証結果2：自分らしくある感覚が高まった】

また、受講前と受講後、そして終了から7ヶ月後の3回に分けて、受講生が持つ本来感（自分らしくある感覚）の度合いを測定してみました。

本来感（自分らしくある感覚）尺度

これが自分だ、と実感できるものがある
いつでも自分らしくいられる
いつも自分を見失わないでいられる
ありのままの自分が出せる
自分のやりたいことをすることができる
いつでもゆるがない「自分」をもっている

各設問に対して7（とてもそう思う）～1（全くそう思わない）のうち最も自分に当てはまるものを選択

出典：「自分らしくある感覚（本来感）と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討」（伊藤・小玉 2005）

本来感の変化（検定の結果）（論文未掲載）

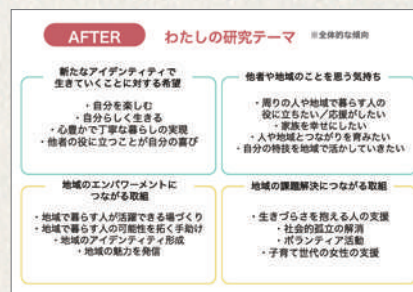
講座前後で本来感UP！
講座終了から7ヶ月後も、終了時の本来感をキープ！
講座初回時と7ヶ月後を比べると「これが自分だ、と実感できるものがある」が大きくUP！

講座受講前後の結果を比較したところ、講座を経たことで、全体的に本来感が向上していたことがわかりました。さらに、講座終了から7ヶ月後に測定した際にも、講座終了時と同じスコアが出たことから、自分らしさの感覚が受講生のなかで継続していたことがわかりました。なかでも「これが自分だと実感できるものがある」という問いに対しては、講座終了直後よりも、終了から7ヶ月後の方が高いスコアが出ています。この結果は、講座終了後も受講生の皆さんが自分らしい生き方を実践し続け、それによって持続的にアイデンティティの再確認や再形成がなされていることを意味すると考えます。



【検証結果3：自利利他の精神が高まった】

さらに、受講生の語りを分析したところ、右図のような4つのカテゴリーが生成されました。細かく見ていくと、各カテゴリーを構成する127のコードのうち、73%にあたる93のコードが、「人の役に立つことが自分の喜び」「周りの人や地域で暮らす人の役に立ちたい・応援したい」といった**自利利他の精神**に関連したものであったことがわかりました。



以上のように、第1フェーズを検証した結果、受講生のアイデンティティが形成され、自分らしい感覚が持続していることがわかりました。さらに、開発僧の地域づくりと同じように、自利利他の精神が生まれていることもわかりました。このことから、講座の中で自己課題を解決した結果、心に余裕ができ、本来持っていた人や地域を思う気持ちが、受講生のなかから発露したのではないかという仮説がたちます。

【第2フェーズ：住民の実現したいことを具体化・具現化する伴走支援】

続く第2フェーズでは受講生の実現したいことを具体化・具現化するためのフォローアップ講座や、まちづくりの専門家による相談会、さらに、自治体による助成金等に関する情報提供や、地域内外の人材とのネットワーキングなどの支援を行いました。伴走支援を行う自治体職員さんや専門家の皆さんは、個々人に寄り添ったサポートをし、必要に応じた支援をされていました。自立を妨げないよう、自力で実行していく力のある方には、不必要な支援は行わないようにされていました。この第2フェーズでは、第1フェーズの講座で、自治体職員さんが住民の皆さんとともに学んだ体験が活きてきます。適切な支援のタイミングを測ることが可能となり、個別最適化した支援ができるのです。

第2フェーズを経て、様々な研究テーマが具体化・具現化していきました。一部の例をあげると、以下のようなものがあります。

- ・整理収納アドバイザーとして起業
- ・実家の空き家をリノベーションしてコミュニティスペースをオープン
- ・メンバー同士がつながり続けるプラットフォームとして市民団体を創設
- ・お母さんの笑顔を応援するワークショップを企画
- ・ハンドメイドでアクセサリを作り百貨店に出店
- ・趣味のバイオリンを活かし、職場の福祉施設にて利用者さんのために演奏のちにその功績が認められ、社内で表彰される

他にも、家族をしあわせにするためのお弁当作りに挑戦されている方や、お散歩中にご近所の方に笑顔で挨拶することに取り組まれている方など、実践の内容は個人的なものからプロジェクト化されたものまで多岐に渡ります。

これらの活動は、地域の課題を解決する取り組みとしても機能しています。しかしながら、実践するご本人にお話を聞くと「やりたいことをやっているだけで、これが地域の課題解決になるとは思ってもいなかった」とおっしゃいます。自分を発揮しながら、自分のやりたいことを地域で実現していくことが、結果的に地域課題の解決につながっている。それが、豊能町のまちづくりの特徴かもしれません。

ここまで、第1フェーズ、第2フェーズを通して、豊能町が個々人の自分らしさや主体性を引き出す学びや支援を提供していることを確認してきました。こうした取り組みは、冒頭でも紹介のあった「個別最適化」というキーワードにも通じるものがあると考えます。近年は、人それぞれに異なったスキルや経験を求める傾向も後押しして、一人ひとりに適した個性の高い学びを提供していくことが、文科省や経産省からも推奨されているそうです。豊能町のまちづくりは、そうした個別最適化の学びと支援を提供していることにも先進性があると感じています。



【第3フェーズ：つながり、応援しあう】

そして最後の第3フェーズでは、豊能町で暮らす住民の皆さんから生まれた「こんなことやってみたい」という願いを叶えるべく、専門家の方がアドバイスを行って自分らしさを応援しあう取り組みを進める「トヨノノ応援会」が始動しています。こちらは、まちづくりの専門家である前田展広さん（前田展広事務所代表）、牛飼勇太さん（tanomo 株式会社 代表取締役）によって実施された事業で、この1年の間に計22組のプロジェクトが地域住民の方の発案で立ち上がりました。そのなかには「とよのわたし研究室」から生まれたプロジェクトもあります。参加した住民の方々は、自分の企画が豊能町にどうしたらより良い影響をもたらせるのかを専門家と議論し、プロジェクトをより共感・応援されるものへと進化させていきました。



こうした取り組みから、豊能町は「自分らしさを応援しあう町」として地域内外に浸透しつつあります。

ここまで、豊能町のまちづくりについて概観してきました。ご紹介した3つのフェーズを通して、豊能町の活動人口と関係人口が増え、それぞれが自分を発揮し、地域を活性化・発展させていく。それが豊能町の内発的イノベーション型まちづくりです。実践から見てきた、豊能町の内発的イノベーション型まちづくりの機能要件は次の4点です。

まちづくりの機能要件

- ・ 個別最適化された学びと支援を提供する
- ・ 住民さんと職員さんがともに学びあう
- ・ 基本姿勢は、住民さんの可能性を信じ切る存在でいる
- ・ まちづくりに関わる人々が連携し、オープンな姿勢でなんでも話し合える関係性を築く

課題と展望

最後に、今後の課題と展望をお伝えして発表を終わりたいと思います。まず、豊能町での実践は現時点で3年が過ぎたばかりのため、長期的なまちの変化については引き続き変遷を追っていく必要があると考えます。また、他地域の内発的イノベーション型まちづくりの事例を集め、検証を重ねる必要があると考えます。

3年を終えて感じていることは、豊能町で実践した内発的イノベーション型まちづくりは、自分と人と地域のみなが幸せになるまちづくりだということです。自分のやりたいことだけを実現すればよしとするのではなく、「人の役に立つことが自分の幸せである」という自利利他の気持ちがあってこそ、自分も、人も、地域も幸せにできる人になれると考えています。今回のような、個別最適化した学びと支援を通じてのまちづくりが、他の人口減少・少子高齢化がすすむ地域のひとつの先進的な事例となって、広がっていくことを期待しています。

一人ひとりの実現したいことが、地域で活かされることで、地域が発展していく。私は、ソーシャル・イノベーションの研究者として、これからも人が本来持つ可能性を発揮することで、意図せずとも社会問題が解決されるソーシャル・イノベーションの仕組みを作りたいと考えております。ご静聴ありがとうございました。





専門家によるフィードバック

今里：みなさまこんにちは。この3月で同志社大学を退職いたしました、今里でございます。松原さんとは、博士前期課程・後期課程の6年間、私が研究指導の教員として彼女の研究をサポートしてまいりました。松原さんは元々心理カウンセラーで、小学校などで心の課題を抱えるような子どもさんを支援されたり、女性の方々のエンパワーメントを支援してこられて、人の心の機微やメカニズムをよく知った方なんです。



これまでの彼女の研究の大きな発見は、いわゆるアイデンティティを発見するひとつの方法論を編み出したことです。自分自身のあるべき姿、どこが自分が一番落ち着くポイントなのかという、いわば自分自身の人格の落とし所を見つけ方ですね。それを2人でいろいろと考えて、セルフ・アンカリング・メソッド (Self-Anchoring Method) と名づけました。アンカリング (Anchoring) とは、錨を下ろすということです。「ここに錨をおろしたら、いい状態で停泊できる」という船舶用語に由来しています。そういった、ご自身が発見されたメソッドと、東南アジアの開発者の地域開発のアプローチを融合させ、かつ内発的発展論という社会学者の鶴見和子さんが提唱した有名な地域開発論のパラダイムとあわせて、独自の地域活性化戦略・ノウハウを提示されました。

ソーシャル・イノベーションというのは、そこで暮らしている人たちが変わらなないと、いくら外部から補助金を持ち込んだり、コンサルティングを依頼しても起こらないんですね。内発的イノベーション型まちづくりというのは、そういった外からの補助や支援に依存するのではなくて、自分たちが変わる。そして、変わるためのいろいろな仕掛けを作っていく。そういった部分にポイントがあると思います。

豊能町の女性住民の方々が、「自分には何ができるのか」というご自身のポテンシャルを発見することにポイントを置いて、徹底した自己啓発をしていったことは、かなりオリジナリティの高い取り組みであると感じました。

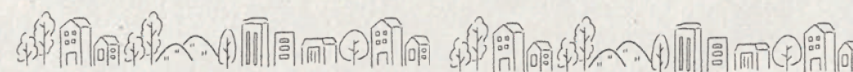
前野：慶應義塾大学の前野です。まず今回思ったのは、「豊能町」というまちの名前がいいですね。「豊かな能力の町」と書いて豊能町。まさに内発的な能力を豊かにする町であるなあと思いながら伺っていました。



わたしは幸せの研究に取り組んでいる者ですが、幸せな人に共通する要素は、やりがいがあって、つながりがあって、チャレンジ精神があって、本来感のある人。これはわたしが研究した「幸せの4つ因子」という幸せの条件なのですが、今回お聞きしていたら、豊能町の内発的イノベーション型まちづくりには、まさしくこの全てがそろっているなど。まちづくりというと、まずまちをよくすることを考えがちですが、それより先に、まず人が幸せであることが大前提であると思います。例えば、幸せな人は、そうでない人よりも創造性が3倍高いという研究結果もあります。つまりイノベーションを起こすためには、住民の皆さんが幸せである必要があるわけです。

ここでいう幸せとは何かというと、自分が本当にやりたいことを見つけて、それを共に取り組む仲間を見つけたり、自利利他を持って関わりあったりしていく。そこで実際にチャレンジをして、本来感を高める。自分が本当にやりたいこと、自分軸を高めていく。そういった幸せの条件を、研究者から見てもびっくりするぐらい満たした活動をされているのだなと感じました。これは本当に、世界に広げていくべき活動だと思います。

いくつかの地域で、まさに今回のような、皆がやりがいを持って、どんどん自分が本当にやりたいことや本当の自分の素晴らしさを見つけて、人々が共鳴しあって発酵するという事例をいろいろ見てきましたが、豊能町のまちづくりも大変よい事例です。ぜひ、この事例は出版するなり、いろいろなところで発表されるとよいかと思いました。



山形県置賜地域の内発的イノベーション型まちづくり

坂倉杏介(東京都市大学 都市生活学部准教授)



坂倉: 今回はお招きいただきましてありがとうございます。東京から参りました、坂倉と申します。豊能町の取り組みとちょっと似た他地域の事例として、今回お声がけいただきました。地域のなかだけだと、その取り組みのよさはなかなか実感しにくいものだと思いますので、他の事例と並べてみることで、豊能町の取り組みをより深く理解する補助線になればと思っております。



わたしは普段、東京都市大学で大学教員をしている者で、専門はコミュニティ・マネジメントです。ハードよりもソフト、人のつながりを通じてまちをよくしていこうということを、実験的に取り組んできました。最近では、早稲田大学のドミニク・チェンさんや NTT 研究所の渡邊淳司さんらと共同してウェルビーイング（幸せ）の研究にも取り組んでいます。どうやってウェルビーイングを実際の現場で実現していくのかということを、ひとりが幸せになるだけでなく、みんなでそれを作りあっていくのが大事なのではないかと、という前提をもとに考えています。また大学では、東京都の港区や世田谷区、そしてこの後にご紹介する置賜地域も含めた全国のいくつかのフィールドで、実践的にまちに関わりながら、学生と一緒に地域のプロジェクトを進めています。

自分を生かして、地域を活かす

表題にした「自分を生かして、地域を活かす」という標語は、この後にご紹介する、東京都港区の「ご近所イノベータ養成講座」を最初に世の中に出した時のキャッチコピーです。豊能町のキーワードは「内発的イノベーション」でしたが、我々は「ご近所イノベーション」そして「ゆるふわまちづくり」という言葉を遣いながら、一般的な課題解決を目指すまちづくり、あるいはリーダーを育てていくまちづくりとは、ちょっと違うアプローチをしています。そのあたりが、豊能町の事例と共鳴できるところかなと思っています。限られた時間ではありますが、取り組みをご紹介しますことができます。

東京都港区について

山形県の取り組みをご紹介する前に、それに関連する、東京都港区での実施事例についてふれておきたいと思います。港区は、人口 25 万～26 万人のエリアです。最近までは人口がずっと増加傾向だったのですが、去年 6 月からは、コロナの影響で減少傾向に転じました。この 8 ヶ月間ずっと減少しています。港区に人が入ってこなかった分、リモートワークなどを活用しながら、地方に人が出ていっているようですね。また、地域特性として会社がたくさんあるのですが、人がつながりやすいとはいいにくい地域でもあります。

まちづくりの原点：東京都港区「芝の家」

港区にはいくつかの地区があり、わたしが関わっているのは、そのうちの芝という人口 4 万人弱の地区の事業です。この地域で最初に始めた事業は、今年で 13 年目となる「芝の家」という事業でした。

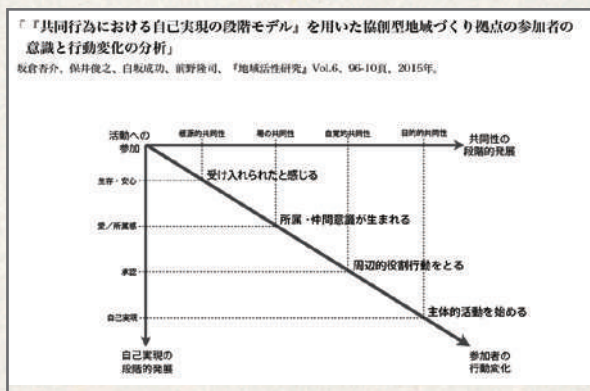
ここは、子供からお年寄りまで、いろんな人が目的なく集まってこられる場所です。何かまちに貢献することを求めるのではなく、お茶を飲んだり、おしゃべりをするのが中心なのですが、そこでいろんなつながりが生まれてくるとなぜか自然に様々な活動が生まれてきました。

事例を見ていて不思議だったのは、特に目的がなく集まってくるのに、なぜみんながいろいろなことを始め出すのか、ということでした。最初から目的がなくても、芝の家に集まっていろいろな人と話をしていると、だんだんやりたいことが生まれてくる。まちをつくる担い手になっていくのです。そうしたメカニズムを、今回コメンテーターをされている前野先生たちと共同研究して、「共同行為における自己実現の段階モデル」というモデルに整理しました。



芝の家

(写真：ご近所イノベーション学校ホームページより
https://gokinjo-i.jp/about_school/)



この研究で非常におもしろいと感じたのは、自分らしさを発揮しようとするほど、他の人との関係性が重要になってくるということです。自分のやりたいことは、自分一人では叶えられないんですね。他の人との関係性の深まり・広まりがそろって初めて自分らしい活動ができるのではないかということを、他の先生方と共同で研究させていただきました。

東京都港区「ご近所イノベーター養成講座」

芝の家については話し始めると長いので、今日は芝地区で取り組むもうひとつの事業である「ご近所イノベーター養成講座」をご紹介します。

こちらは今年度で8年目を迎えました。以前所属していた慶應義塾大学が芝地区にあり、在籍時代に役所の方と開発したのがこの事業です。一部の人がNPOなどをつくってがんばるまちづくり、ではなく、多くの人がちょっとずつ、自分の近所で活動することを後押ししようという事業です。



まちづくり講座あるある「誰もやらない現象」

まちづくりの講座でよくあるのが、まちに興味のある人が集まって、地域課題を見つけて、解決方法を考えて発表するというパターンです。なかなかよい解決案は出るのですが、その結果よく見られるのが、**誰もやらない**という現象なんです。これ、結構ありませんか？

なぜそうなるのかと考えた時に、その課題は地域の課題であって、ご自身の課題ではないからだという点に行き着きました。アイデアを出しても、奇跡的にマッチングが合わない限り、その後に時間と労力をかけてそれを実行することにはなかなかつながらない。まして、忙しい東京都心部でそんな企画をしても誰が集まるんだろうと。

ということで、逆にしました。**その人がやりたいことを、まちにつなげる**。趣味の範囲で、あるいは家族や友達との間でもいいんだけど、それをちょっと近所につなげてやれる方法をみんなで考えてみよう、という講座をやっています。近所に新しい結合（＝イノベーション）を生み出すことで、暮らし方やコミュニティの関係、幸せのかたちを少しずつ変革していくという意味を込めて、「ご近所イノベーション」と名付けてみました。

地域で自分らしさを発揮する人を増やす

この講座で目指しているのは、**住民の立場で、自分の思いを実現する様々な取り組みをする人を増やそう**ということです。その結果として、つながりがどんどん生まれ、まちの困りごとが解消していくわけです。東京で暮らすと、自分の能力を活かしてサービスを作るという仕事の部分と、プライベートや家庭のどちらかに人生が分かれている傾向があります。でも、その真ん中の「地域で暮らす」があるのではないかと。ここで自分らしさを発揮することが結構大事なのだと思います。事務局スタッフには、慶應義塾大学の先生や、区役所の方にきていただいています。そして特徴的なのが、10名以上いる事務局の方のほとんどが、修了したら終わりではなく、「この講座がすごくよかったから、今度は講座の作り手に回ろう」という気持ちでいて下さるのがとても心強いです。



では、講座では何をやるのか。まず自分の持ち味を知る。そして、地域に仲間を増やす。この2点を大事にしています。思いやスキルがあったとしても、地域に仲間がいれば何もできません。また、アイデアを発表して終わるのではなく、自分が取り組みたいテーマを作って、一か月ぐらいちょっとやってみるというプロトタイピングの期間を設けているのも特徴です。ちょっとやってみた結果を発表して、さらに仲間を集う。そんなやり方をしています。実践するなかで段々わかってきたことは、自分のやりたいことばかりやっても続かないということです。なので、自分のやりたいことと、社会にいいことをいい感じにブレンドしていくことが肝だと思っています。



仲間と一緒にプロジェクトを「ちょっとやってみる」

これまでの参加者は17歳から79歳までと多世代に渡っていて、男性よりは女性の方が少し多い割合になっています。毎回4~6チームぐらいていろんな活動をしています。例えばある女性の方は、「マンションの防災がマンションによって違うのはおかしいのではないかと考え、女性防災士の活動を支援する団体をつくってご活躍されています。またある方は、東京は地方から出てきて子育てする方も多いなかで、お父さんもお母さんも地方出身者で近所に身寄りのない家庭が非常に多いという点に着目しました。そして、特にお父さんが所在ないということで、お父さん同士の交流を目的とした「みなと区パパ友の会」を発足していました。他にも、都市部のオープンスペースで活動したい団体が、空き地になった芝の家の跡地をみんなでつくってこうとする活動などもあります。

こうした実践を、「発表会」で報告して終了していく流れとなっています。



都会に生まれるご近所のつながり

修了生が150人以上いるので、受講することで暮らしのまわりに100人以上のゆるやかなつながりができるようになります。そうすると、近所を歩いていると知り合いに会うんですね。これ、都市部では結構劇的なことなんです。

そして、講座が修了してからでも気軽に立ち寄れる場所があり、安心して地域に関われるようになる。継続したり、新しく生まれる活動がある。まちが単に住所として存在するだけのものではなく、自分の居住地として、自分が暮らしていると実感できる場所になっていく。それが「ご近所イノベータ養成講座」です。



山形県置賜地域「人と地域をつなぐ事業」

さらに今日ご紹介するもうひとつの事例が、山形県置賜地域で実施している「おきたま地域づくり 人と地域をつなぐ事業」です。こちらは置賜広域行政事務組合（置広）が主催する事業で、今年で5年目を迎えます。最近コンセプトブックができて、タイトルが「わたしをみつめるゆるやかなつながり」と、まさに今回のフォーラムのテーマそのものだなあと感じながら眺めていました。



置賜地域は、東北の中では福島の上、山形の一番南側にあります。先ほどの港区の人口は25～26万人でしたが、置賜地域は米沢市、長井市、南陽市などの8市町合わせて20万人少々となります。さくらんぼやぶどうなどの農業が有名ですが、NECの工場があり、パソコンなどの機械関係の産業もある地域です。また、置賜地域の中で仕事や買い物を完結する人がとても多く、ひとつの経済圏として成り立っているところにも特徴があります。

この事業を主催する置広は、8つの自治体のゴミ処理などの行政サービスを共通して行うためにできている一部事務組合（複数の地方公共団体が行政サービスの一部を共同で行うことを目的として設置する組織）です。このように、普段は共通の行政サービスを担うのがメインの業務となる置広が、広域連携の人材育成事業をはじめようということになり、その中で始まったのがこの「人と地域をつなぐ事業」です。

これは全国的な傾向だと思うのですが、地方は都市部に比べると自動車移動が多く、家と職場を往復する間に、他の人と会うチャンスが全然ありません。サードプレイスの場所を確保しにくく、地域のつながりが増えていきづらい。そんなまちで、人と地域がつながるような事業をやろうということで始まったのが、この「人と地域をつなぐ事業」です。

この事業では、豊能町の例と同じように、1年間の講座をします。大体6月ごろから始まって、年に2～3回集まり、3月に終わる。その間に東京に遊びに行ったり、東京から大学生が遊びに来たり、という交流もありながら進んでいます。メイン会場は、「スタジオ八百萬」という山形県に初めてできた米沢市にあるワークスペースを利用しています。

5年間で60人弱の受講生が誕生したのですが、「ご近所イノベーター養成講座」と比べると、圧倒的に20代～40代前半の女性が多い。それを意図したわけではなく、「地域につながりができて、一緒に活動したりお話ができる仲間が欲しい人はいませんか？」あるいは「会社と家の往復だけではつまらないですか？」「これまでまちづくりを頑張ってきたけれど、ちょっと最近疲れていませんか？」といった声かけをしたところ、集まっていた方が、結果的に若い世代の女性が多かったというわけです。



講座の内容については、豊能町の「わたし研究」ほどしっかり自分研究をしているわけではありませんが、講座の初日にこれまでの人生を振り返って棚卸しをする「エナジーカーブ」を描いて、いいときと悪いときを振り返ってみるというようなワークをやっています。チェックイン・チェックアウトを必ずやっていることも共通ですね。他にも、「私のウェルビーイングってどんなものですか？」「このまちでどんな風に生きていきたいですか？」といった問いを考えてみんなでシェアしています。「どんな地域にしたいですか？」「どんな地域活動をしたいですか？」ではなく、「どんなふうに生きていきたいか」を語るのが特徴です。

キーワードは「ゆるふわ」

キーワードに掲げている「ゆるふわまちづくり」とは、“マッチョなまちづくり”の対義語のようなものです。ここで“マッチョ”と呼んでいるのは、「大きなことを、みんなで力を合わせて、しっかり組織を作って、頑張って成し遂げよう」というような、従来の仕事の仕方のことですけれども、初年度に集まってきた受講生の皆さんから「それとはちょっと違う雰囲気だね」と声があがり『人と地域をつなぐ事業』はゆるふわだ」と名付けてくださったわけです。

「ゆるふわって何だろうな」と改めて考えてみますと、まず「ゆるい」は、決まてないということです。人数やメンバー、やることが決まってるわけではないので、多様性を許容できる。そして、「カチッとしていて同じでなければいけない」というわけではなく、違いを超えて関わり合う。そういうところが、たぶん「ゆるい」ということなんだろうなと。多様性に関わっているとすることが「ゆるい」には込められているのだと思います。

そして「ふわっと」は、まだ何が課題なのかわからないし、私は何ができるのかわからない。そんな可能性に開かれてる状態です。未来を作っていくときは、カチッとしているわけがないと思っています。ふわっとしていない限りは、本当に必要なもの、本質的なところに届かないのではないかと。「ゆるふわ」は、そんなとても未来志向な言葉なのではないかと考えました。

従来型のまちづくりのように、何かを頑張るための研修をするのではなく、自分たちが「この人生、この地域で本当はどうやって暮らしてきたいんだろう」ということを考えて、みんなでやってみて、それが実現できる暮らし方ができるような状況をつくる。それもまちづくりと言っているのではないかと。そんなことを、1～2年かけて私も教えていただきました。



東京の大学生との交流

わたしのゼミの学生も毎年置賜地域にお世話になっていて、夏合宿では、地域の方の「こんなことやりたいんだよね」という思いを全力で加速させるということを課題にしています。例えばある年は、東京から置賜地域に嫁入りされた女性のご実家が、ものすごく素敵な農家だったので、これを使ってどんなことができるかを提案しました。他にも、車椅子に座って心のバリアフリーの活動をさせている加藤健一さんの想いを実現するためのワークショップの開催や、スタジオ八百萬の周辺地域で、町内の人々のつながりを取り戻していくためのイベントを夏休みの1日だけ大学生が主催したりもしています。

そんな交流をしているうちに、大学生と置賜の人たちとの間につながりができるようになりました。今年すごく感動的な出来事があったんです。東京で緊急事態宣言が発令されたとき、置賜の人が「地方から東京に出ている子は一人暮らしでさぞ辛かろう」ということで、地元のお米やお菓子、日本酒なんかを学生たちに送ってくださったんです。

私たちは「Tamazon」と呼んでいるんですけども（笑）年3回ほど、置賜から食べ物を送っていただくということがありました。学生にとっては、親でも親戚でもないのに、自分の暮らしを気にかけて下さる方が地方にたくさんいる。そんな活動になっています。



「普通の人たち」のつながりをつくる

先にご紹介した東京都港区の「ご近所イノベーター養成講座」と「人と地域をつなぐ事業」も、置賜の方々がいノベーター講座のシンポジウムに遊びに来てくださったことをきっかけに、交流が続いています。代表的なイベントは「24時間トークカフェ」です。住民主体のまちづくりというのは、東京よりも地方の方がはるかに進んでいる。そういう事例をしっかり学んで、かつコストを抑えて、ということで「0泊2日」の24時間で実施しているイベントです。

インタビュー調査から見てきた、内発性が生まれる要因

実は、今年 4 年生のゼミ生の梅澤さんが、卒業論文のテーマに置賜地域の「人と地域をつなぐ事業」を取り上げていて、松原さんの論文を先行研究にして事例分析をしていたんです。40 数名の受講生のうち 12～13 人の方をピックアップして、ライフストーリーインタビュー調査を実施し、その結果を地道に質的分析していました。今回は、その中から 2 名の方のインタビュー内容をご紹介します。

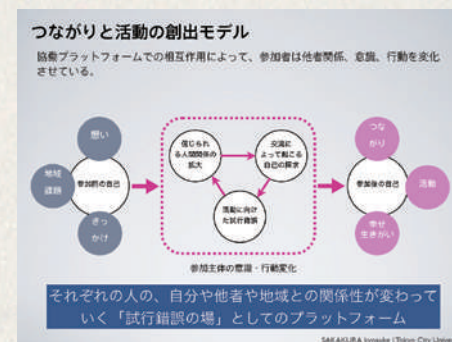
まずは米沢市出身の A さんです。受講時は地域の大きな病院で助産師さんをされていましたが、受講後に退職して、産後ケアのサロンを立ち上げられています。受講前のご自身の様子をふり返ってみると、「目立つことをすると打たれるんじゃないか」という、地元に対する諦めにも似た感覚があったようです。ですが、講座の中でいろいろお話ししているうちに、本当に自分がやりたいことは産後ケアだったんだとわかってきたんだそうです。興味深いのが、産後ケアをしようと最終的に決断したのが、東京に行く新幹線の中でおしゃべりをしていた時だったんだそうです。ちょっと地域から離れておしゃべりしていると、これまでとは全然違うトーンになっていくんです。東京に行くということがひとつの刺激になって、そこで何かが発芽し「よしやろう」と決断するきっかけになったようです。

2 人目の C さんは、東京出身の方で、若い時には大きな会社でバリバリ働き、その後に米沢市へ嫁入りしたそうです。嫁入り先が老舗の酒蔵で、そこで子育てをしながら、それなりに幸せに、充実して生きていたとのことでした。でも振り返って考えると 100% 満足していたわけではなく、どこかモヤモヤしているところがあつたと。今にして思うと、結婚して米沢に来てから「主語が私ではなく、家族や嫁ぎ先になっていた」のだそうです。そのことに、みんなと話をしている中で気がついたと。そしてこの先は、「私がどうしたいか」と自分を主語にしながら、会社や地域のためになることをしていきたいんだとわかったら、すごくスッキリしたとおっしゃっていました。

こんなエピソードがあと 10 名分ぐらいあります。分析するなかで出てきたのは、自分のことを話してもいい場があること、そしてその語りを他の人に聞いてもらえるということが、内発的な発展につながっていた要因ではないかということ。そして東京に行ってみるなど、ちょっと一歩踏み出すきっかけが埋め込まれていることもポイントのようです。

そうするうちに、だんだん自己理解や自己肯定感が高まり、変化が生まれ、ひいては地域活動を始めるのではないか、というのが彼女の論文での気づきでした。

わたしの研究でも、地域の居場所で活動する人たちの調査から生まれた『『つながり』と『活動』の創出過程』というモデルがあります。



活動に参加する前は、想いなどはいろいろあるのだけれど、やりたいことが決まっていたわけではない。ただ参加する中で、本当に思っていることを言ってもいいという、信じられる人に出会うわけです。本当に思っていることを言える相手というのは、家庭や職場の中には、意外とないんですよね。家族に「実はカフェがやりたいんだよね」と言ったら「バカ言ってんじゃないわよ」と一蹴される可能性も高い（笑）そうではなくて、ちゃんと聞いてもらえる人と出会う。そこで話していると、だんだん自分が本当にやりたかったことが探求されていって、気がつくと、それを一緒にチャレンジできる人間関係ができていきます。チャレンジしてみると、また人間関係が増える。そうしてぐるぐる循環しているうちに、本来的な自分が見えてくるわけです。先ほど前野先生が仰っていた「幸せの4因子」の、関係性、自分に対する前向きさ、達成感と、本来感。こういったものがだんだん生まれていって、本来の自分になっていくことがすごく大事だと考えています。

内発性というのは、立場は異なるけれど信頼できる他者との関係性や、変化の中で起きるとわたしは考えています。そういった出来事が起こるような、日常から離れた場所が大事なのだと思います。しかも、その日常から離れた場所は、クローズドなものではなく、地域に開かれていたり、地域につながっている。



そうすると地域が自分ごとになっていて、いろんな人が自分を発揮し、それが自分の瑞々しい暮らしにつながっていく。そんなプロセスが起こると、純粋に一人ひとりが自分の叶えたいことを実現しようとしていく、ということが地域にとってもすごく大事な価値を生み出していくことにつながるのではと思っています。

専門家によるフィードバック

前野：先ほどの豊能町の事例と、港区や置賜地域の事例はよく似ていてます。どこが共通しているかという、皆さんもうお気づきだと思いますが、私の言う「幸せの4因子」と一緒ですね。



両者の事例と、幸せ研究の観点から言えることは、みんながもっと根源的な問いをすることが大切なんじゃないかということです。私はなぜ、今、この地球上に生きているんだろう。なぜ、日本に生まれたんだろう。なぜ、この地域に生まれたんだろうという。

そうした、答えはないけれど根源的な問いを共有していくことが、人々がつながるひとつの方法であると思います。地域のなかで共有すれば、地域で仲良くなれる。地球規模で共有すれば、全ての人類は共感しあえると思っています。それが自然にできて、みんながつながって幸せになっていく仕組みというのが、どちらの事例にも含まれていて、素晴らしい事例だと思いました。

今里：坂倉先生の「芝の家」「三田の家」は私自身も随分前から存じ上げていて、私のなかのひとつのモデルにもなっています。やはり、実際に集まれる場や空間というのは大事ですね。

私自身も九州大学に勤めていた時代に、大学のある福岡市東区箱崎という地域でまちづくりをやっていました。「筥崎公会堂（はこざきこうかいどう）」という民設の公民館をつくったんです。そこでオーガニックのコミュニティ・レストランをやったり、居酒屋的なことをしたりして。



自由にできる空間があると、いろんな人が集まってきて、「あれをやりたい、これをやりたい」と言い出すんですね。まさに先ほどの坂倉先生のお話にあった、**私がやりたいことと、社会をよくすることのかけ算**ですね。そのかけ算が、非常に具体的な様々な形で実現していきました。そのうちのいくつかの活動は、わたしが京都に来た後も、まだまだ続いています。リーダーをされている方は、今年84歳。毎日、パソコン教室の先生をやったり、有機農業の先生をやったりと、非常に盛り上げてくれています。そこから新しいつながりがどんどん増えてくるということをまさに経験していますので、この場づくりは大事であると実感を持って言うことができます。

似た事例では、私のゼミに、松原さんと同時期に博士論文を提出した杉山さんという方がいらっしゃるのですが、彼は相続で受け継いだ4階建てのアパートの地上階を改装して、「民公館」という名前をつけて様々な活動をしておられます。彼の研究からも、場というものの重要性や、そこからいろんな創発が出てくる可能性を確信いたしました。そういった創発が生まれる場が、全国にどんどん広がっていくことを願っております。

パネルディスカッション

フォーラムの後半では、「暮らすまちのwell-beingと内発的イノベーション」というパネルディスカッションを実施しました。まちづくりの型に当てはめるのではなく、自分たちが生きやすい/暮らしやすい環境を整えていくまちづくりのほうが、中長期的にはよりイノベティブなものになっていく——。そんな発想のもとに展開されたディスカッション。その濃密な対話をダイジェストでお届けします。

暮らすまちのwell-beingと内発的イノベーション

登壇者：今里茂、前野隆司、松原明美、坂倉杏介、浅海毅

モデレーター：井上亮太郎（パーソル総合研究所） 文：松尾美里



井上：皆さんこんにちは。後半のパネルディスカッションのモデレーターを務めます、パーソル総合研究所の井上亮太郎と申します。前半では豊能町と置賜地域の2つの事例を聞いて、内発的イノベーション型まちづくりのイメージが湧いてきました。

いずれも住民・行政が協力し合って成果を生んでいますが、実施当初に工夫された点を教えていただけますか。



自治体で内発的イノベーション型まちづくりに取り組むための工夫

浅海：事業を始めるにあたって、たしかに最初は自治体のなかで戸惑いがありましたね。ですが、話し合いを重ねるなかで、この事業の重要性について共通理解が進んでいきました。

松原：「とよのわたし研究室」はゴール設定型ではないので、成果も見えづらく、自治体にとってはチャレンジングな試みだったと思います。また、取り組みの当初は、「一人が変わったところで、地域が変わるはずない」という声もありました。ですが豊能町の職員の方々は、「住民の皆さんの可能性を信じきる存在にいる」という姿勢を一貫しておもひでした。そのおかげで、住民や行政という立場を超えて対話ができ、一緒によりよい豊能町をつくらうという絆ができていきました。

また工夫という点では、研究室という名の通り、研究員になってくださった住民・職員の方々も私も、活動のあいだは白衣を着ることにしました。「母親」や「妻」といった日常の役割から離れて、楽しく探究する姿勢をもちやすくなったと思います。

井上：可能性を信じる力、胆力が原動力になり、やがて実績が出ることで応援者が増えていったのですね。坂倉さんは、「おきたま地域づくり」ではどんな工夫をされましたか。

坂倉：カギになったのは、思い込みをはずしていったことですね。置賜広域行政事務組合の斎藤拓也さんによると、置賜地域での「人と地域をつなぐ事業」は、7年間、腰を据えてやると言い切って始まった事業だったんですね。ただし、職員の人事異動がつきものであるため、担当が変わっても継承できるかという課題がありました。そこで今回つくったのが、人と地域をつなぐ事業のコンセプトブック「わたしをみつめる ゆるやかなつながり」です。この冊子ができたことで、事業の意義を継承しやすくなりましたね。



心の奥底にあった「やりたいこと」が地域の力になる

井上：内発的イノベーション型まちづくりと、従来のまちづくりとの間にはどのような違いがあるのでしょうか。

松原：内発的イノベーション型まちづくりのカギは、一人ひとりの心の奥底に眠っていた「やりたいこと」が活かされて、地域が発展していくという点です。あくまでフォーカスするのは個人。個人のやりたいことの実現に適切に介入することで、その人の潜在能力が開花していきます。能力を発揮して自分らしく生きられていると、余裕が生まれ、他者のことも考えられる「自利利他」の精神につながっていく。そして、それがよりよいまちをつくる原動力になる。これが個別最適化の新しい形であり、今までのまちづくりとの大きな違いだと思います。

坂倉：住民からすると、自分たちが幸せに暮らせている実感が大事です。けれども実際には、個人の幸福と、地域やまちがよくなることに距離があるように思います。でも本来なら、地域の未来に自分の活動・仕事を通じて貢献できている実感の有無で、個人のwell-being（幸せ／ウェルビーイング）は大きく変わります。また貢献を通じてネットワークもより豊かになりますし、「受益者」から「一緒にまちづくりをする仲間」へと意識が変化するのではないのでしょうか。





前野：私は普段、幸福学の研究をしています。研究の結果、幸せになる条件は 4 つの因子に集約できることが明らかになりました。それは、「やってみよう！」因子、「ありがとう！」因子、「なんとかなる！」因子、「ありのままに！」因子です。豊能町も置賜地域も、「幸せの 4 つの因子」がまさに体现されたまちですね。自由なマインドセットで仲間とともに色々試しながら、自分らしいという感覚、つまり本来感を高めていますから。

現代社会の孤立化や、まちとの絆の希薄化は大きな課題となっています。本日紹介していただいた 2 つの事例は、その改善につながる優れた先駆事例です。何より、地域づくりの原点は幸せな住民を増やすこと。幸せな人のほうがそうでない人に比べて創造性が 3 倍高いという実験結果もありますから、創造的なまちづくりの可能性が上がります。ぜひ継続してほしい活動ですし、「この活動を全国や世界へ広げるには？」という問いをもっていただけたらと思います。

今里：その問いについて掘り下げる際、世界の事例に目を向けてみてもいいでしょう。たとえばスウェーデンのある村はイノベーターの宝庫です。小中学校ではアントレプレナーシップ教育がさかんで、小規模ながら世界的な企業が多数あります。住民同士の仲もよく、非常に元気なまちです。

もう 1 つ、ソウルでもクリエイティビティを発揮している地域があります。住民たちが学校・図書館・劇場など、必要なものを自分たちで話し合ってつくっているのです。そうした世界の事例を、そのまま日本へ持ち帰るのは難しいでしょう。ですが、現地に行くと、well-being とは何かを肌で感じられ、連帯経済をつくりだすヒントを得られるはずです。



イノベーターが育つまちづくりの秘訣とは

井上：今里先生にご紹介いただいたような、イノベーターが登場するまちづくりを進めるには何が必要なのでしょう。

坂倉：イノベーターが次々に現れるまちをつくるには、まず、ゲームのルールが変わっていることに各自が気づき、支援の仕方もそれに応じて変えていく必要があります。決まった型にはまるのではなく、色んな資源を組み合わせ、柔軟なコミュニティをつくっていかないとはいけません。もちろん個人も行政に任せきりでなく、まずは自分でやってみようという意識をもつことが大事です。

井上：確かに、それはまちづくりに限らず、企業や組織でのイノベーションにも当てはまる視点だと思います。前野先生はいかがですか？

前野：日本人は真面目だからルールに従わなければ、と考えがちなんですよね。ですがルールに縛られると、不幸のメカニズムが働いてしまいます。それを打破していくためには、思い込みをはずして、多様な人と交流し、何度も失敗して、それでも「何とかする」と楽しく自分軸で取り組んでいく。こうした姿勢がイノベーションのもとにもなっていくと考えます。



これからのまちづくりの展望

井上：最後に、今後のまちづくりをどのように発展させたいか、あるいはどんな発展のあり方がよいのか、それぞれのお立場からコメントをお願いしますか。

松原：人生を振り返ったときに、「私に生まれてきてよかった」と思って人生の幕を閉じたいという願いに気づきました。そんな風に、「このまちで生きてきてよかった」と思える個人が増えていく。そのようなまちが、幸せなまちなのだと思います。



浅海：本来まちづくりをやるのは行政でなく、あくまで住民の方々です。色々な人の願いを汲み取って、それが実現できるように切り盛りするのが行政の役割だととらえています。また、松原さんや坂倉さんのように、個人の活躍がますます重要になっていきますので、そうした動きを支援していきたいですね。



坂倉：「わたし研究」を尻込みしている人がまだまだ多いですが、自己実現とは決して単なるわがままではありません。他者との関係があってはじめて可能なものです。大事なのは、全員が実現しようと思うこと。すると全員が完全に満たされることは難しく、衝突が起こります。そこから、「じゃあどうしていこうか？」と対話が始まるのが民主主義です。一人ひとりが生き生きとするためには、ぶつかりながらも互いのやりたいことを理解していくプロセスが欠かせない。そんな建設的な対話が、まちのそこかしこで起きるといいなと思います。



今里：まちづくりは義務感でやるものではなく、面白く楽しいものであってほしい。そのうえで、持続可能性を考えると「儲かる」ことが大事になってくる。「こうするともっとみんなうまくいく」というのを、ワイワイ対話して考えていくことが大事じゃないでしょうか。

前野：幸福の研究をし続けているのは、世界中が幸せな人であふれ、平和になってほしいという願いがあるからです。これは一人ひとりの自己実現によって可能になるもの。その道のりは遠いですが、よい事例を集めて、伝えていくことが研究者の役割です。私自身の研究を発展させて、その旅を続けていきたいですね。

井上：貴重なお話をありがとうございました。今後のさらなる発展・全国への展開を楽しみにしています。

付録

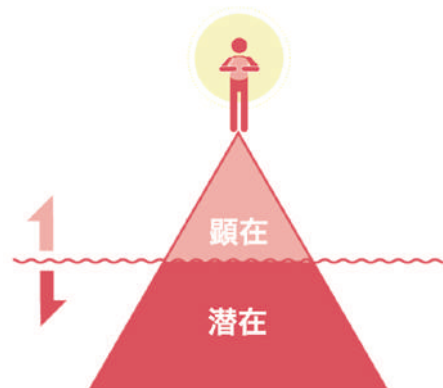
- ・豊能町の内発的イノベーション型まちづくりモデル
- ・フォーラムをご覧いただいた皆さんからの感想

ひとりの可能性からはじまるソーシャル・イノベーション 豊能町の内発的イノベーション型まちづくりモデル

内発的イノベーション型まちづくりは、地域に合わせて様々な方法で展開することができます。豊能町では、地域に暮らす方々の潜在している可能性をまちの大切な資産と捉え、その可能性を発掘していく人材教育からまちづくりをスタートしました。まちづくりの実施にあたっては、行政・専門家・社会起業家など、地域内外の関係者が協働し、次の3ステップに取り組んでいきました。

STEP01

自分を内側から理解し、眠っていた可能性を発掘



自己教育講座 / 発表会

STEP1では、地域で暮らす女性を対象に、当人も気づいていない隠れた才能や願いを見出ししていくための「自己教育講座」(月1/全5~6回)を実施しました。講座の最後には、地域住民の方々や、地域内外の有識者・企業関係者などを招き、講座を通して発見した、これから実現したいことを発表する機会を設けました。この場をきっかけに、共感をベースとした将来的な協力関係が生まれることを目指しました。

>>詳細は10ページへ

STEP02

実現したいことを具現化し、可能性を発揮



フォローアップ講座 / 個別相談会 / 助成金支援

STEP2では、発見した才能を活かしたり、願いを現実のものにしていくために、各プロジェクトや個々人に応じた各種支援を用意しました。フォローアップ講座や個別相談会、地域内外の関係者とのネットワーキング、助成金などの活動資源に関する情報提供など、それぞれに応じたサポートを提供しました。

>>詳細は12ページへ

STEP03

地域でつながり、応援しあう



プラットフォーム化

STEP3では、可能性を発揮する人や、まちづくりに関わる人同士がひとつになって、互いに応援しあえる関係性を築きました。その結果として、それぞれの取り組みがさらに発展し、将来的には地域の課題が解決されていったり、地域が活性化していくことが期待されます。こうしたプロセスを通して、豊能町は「自分らしさを発揮しあえる町」へと発展しつつあります。

>>詳細は13ページへ

一般社団法人こころ館（中間支援団体）

豊能町

前田展広事務所（社会起業家）

播磨 Casagoya（社会起業家 / まちづくり専門家）

フォーラムをご覧いただいた皆さんからの感想

取り組みに興味・関心を持った

・自然資源に恵まれた地域で、一人ひとりの意識改革により、住民全員が豊かな気持ちで日々生活できるようになるという発想また改革は素晴らしいと思いました。是非ともこのイノベティブな考えで日本全体を変えて欲しいです。

・この内容を、世界に先駆けて実際に取り組んで来られた先進性に大変敬意を感じますし、今後の更なる深まり及び拡がりをスゴく楽しみに思います。笑顔になれる住民の方が多くいる地域は本当に魅力的だと思いますし、日本になかなか足りていないウェルビーイングな幸せに溢れる町の先駆けとして、あり続けてもらいたいです。

・自分の内発的な動機から公共を生み出していく、能動的な町・場作りぜひ自分の会社や町でも参考にさせていただきたいと思います。

・まちづくりというとなんだか硬いイメージでしたが、「ゆるふわまちづくり」というネーミングセンスが秀逸だと思いました。個人の自己実現とまちの発展が掛け合わさった、これからのまちづくりに期待が高まりました。

・このような取組をされている方や、それに賛同されている方は、大変素晴らしいと思いました。未知の内容でしたが、大変興味を持ちました。

・効果の見えづらい事業の可能性を信じ、予算をつけて実施した行政が大変素晴らしいと感じました。これからの展開にも期待しています。

幸福を次世代の価値基準に

・わたし研究が全国に広まっていき、幸せ視点で世の中が良くなっていくことを心から願いつつ、ワタシ自身も実践していきながら、幸せの連鎖を広げていきたいです。

・今後はお金視点ではなく、幸せ視点でも物事（街づくり、企業の新規ビジネス等）が進むべきだと感じます。そのためにも、幸せの価値の定量化ができるといいのでは?と思いました。

豊能町のこれからの期待

・豊能町は災害もないし、良いところだと思って住んでいるが、最近なかなか良いことをやっていて、益々住みよい町になりそうで希望が持てる。

・今春よりご縁があり、豊能町でお仕事をさせていただくことになりました。今回のフォーラムでの、「ない仕組みをつくり、お金を生み出し、発展に繋げる」「しあわせの4つの条件」「ゆるふわ」等のお話は大変興味深く、また、身近な、わたしの故郷でもある豊能町で、「こころ館」のような活動、町の取り組みがあることを実は初めて知りました。そして、豊能町民は内発的イノベーション向きな方が多く住まわれている町ではないかと思ったりします。今日学んだことを活かし、地域で「自分」の「やりたいこと」を実現していくことができればいいなあと思います。

おわりに

2018年度から2020年度にかけて豊能町で実施した内発的イノベーション型まちづくりは、人口減少・少子高齢化などの課題を抱える地域における、新たなまちづくりの可能性を示唆した事例だと考えます。

従来のまちづくりは、宅地開発や企業・大型商業施設の誘致に代表されるように、ハード面の整備や経済発展を重視したものが中心でした。しかし近年では、人と人とのつながりや、その町に暮らすことの幸福感など、ソフト面に重きを置いたまちづくりが主流となりつつあります。

内発的イノベーション型まちづくりは、地域に暮らす人々が、互いに支え合い助け合いながら自らの可能性を発揮し、それぞれの願いを実現していくことで、地域課題が解決され、結果的に地域が活性化していくというモデルです。個々人の可能性の発掘から具現化までを一貫して援助することで、住民の皆さんの自己実現と、地域の発展の双方が叶えられていく点にその特徴があります。実際に、今回のまちづくりに参加した皆さんの多くは、自分らしさを発揮してそれぞれの夢を叶えていきながら、豊能町に活力をもたらす存在として活躍されています。

現在、豊能町には「自分らしさを応援しあう町」という風土が根付きつつあります。住民の皆さんが、自分の可能性を地域で発揮していくことが、結果として「豊能町らしさ」につながっていくと信じています。3年間に渡り、豊能町で取り組んできた内発的イノベーション型まちづくりは、2020年度で節目を迎えます。この事例が、今後のまちづくりに新たな可能性をもたらす一助となりましたら幸いです。



豊能町住民人権課女性活躍室
一般社団法人こころ館

「内発的イノベーション型まちづくりフォーラム」報告書
2021年6月末日発行

発行 豊能町

〒563-0292

大阪府豊能郡豊能町余野414番地の1

072-739-3418 (住民人権課)

<http://www.town.toyono.osaka.jp/>

制作 一般社団法人こころ館

info@cocorokan.org

075-595-8508

<http://cocorokan.org>

表紙
イラスト iro-design

本報告書に関するお問い合わせは、豊能町住民人権課までお願いいたします。